

Can't Stop Fall in Love

キャントストップフォーリンラブ

## 第一話

「ああっ、あ……っ、ん、ああっ、ああ……っ……」

キングサイズのベッドは、私が日頃使っている安物のベッドと違い、スプリングがきいてよく弾む。

一流ホテルの高層階のスイートルーム。大きな窓の外には星をちりばめたように幻想的な夜景が広がっているけれど、今の私にはそれを楽しむ余裕なんか、ない。

広くて薄暗い部屋の中には、私のいやらしい嬌声（せうせい）と彼の荒々しい吐息、ベッドの軋（まじ）む音、互いの身体がぶつかり合う音が絶え間なく響いている。

どうしてこんなことになったのか、呆けた頭では思い出せない。だけど、狭い肉壁が押し広げられる感覚と、奥底を突かれる息苦しさ（かたまり）が、これが夢ではなく現実であることを教えてくれる。

私の身体に入り込んだ硬くて熱い塊（かたまり）は、確かに『彼』なのだ。

律動に堪（た）えるように腕を伸ばせば、彼の首にたやすく手を回すことができた。ここぞとばかりに抱きついたらって、咎（とが）める者は誰もいない。

筋肉質で白く滑らかな彼の肌は汗ばみ、体温が直接じわじわと伝わってきた。鼻孔をくすぐる甘い匂い、耳にかかる乱れた息、柔らかな髪――

私は今、ずっと傍で見ているだけだった憧れの先輩の腕の中にいる。そう思うだけで、痺れるほどの快感が背筋を駆け抜けていく。

彼の首に回した腕に力を込めると、ふいに視線がぶつかった。

乱れた前髪の間から覗く二重の大きな目は熱を帯びて潤み、やや太めの眉は少し寄せられている。その姿は官能的で、いつにも増して色気があり、艶めかしい。

……本当に、惚れ惚れするくらい綺麗な顔。

どれだけ一緒にいても見慣れることのない彼の整った顔が至近距離にあり、思わず頬が熱くなる。だけど次の瞬間、それ以上に熱い彼の唇が落ちてきた。

「んん……っ……」

唇の隙間から入り込んだ舌が丁寧な歯列をなぞり、内頬を撫で上げる。上顎を舐められると、なんとも言えない甘い痺れが広がり、全身から力が抜けた。なおも口腔内を動き回る彼の舌はやがて私の舌をとらえ、あつという間に絡め取られる。

ぴちゃぴちゃといやらしい音を立てながら、互いの舌が絡まり合った。そのねっとりとした感触と温度に、今にも溶けてしまいそうだ。

――ああ、ヤバイ。頭がぼーっとしてきた。

口づけが深くなるにつれて、思考が奪われていく。

密着した彼の胸からは、自分のものとは違う鼓動が伝わってきた。少し速いリズムが、彼の高揚を物語っている。

もう、私、幸せすぎて死んじゃうかも……

「――どうかした？」

彼の唇が離れ、耳元で甘く囁かれる。目を向けると、小さめだけれど厚い彼の唇の端がニヤリと上がった。

「考えごとをする余裕があるなら、もっと激しくしてもいいよね？」

「あああつ！ ダメ、せんばい……っ、やあ、ああ……っ」

彼は私の両足を抱え上げ、押し広げた。彼の昂ぶりが角度を変えて私を貫き、最奥にまで達する。さつきままでとは違うズンツとした重い衝撃に、夢見心地だった気分は一気に吹き飛び、目の前にチカチカと星が舞った。

「やあ、待って、先輩……はあ、これ、や、あ、あああつ」

彼との繋がりがより深くなっけいき、腰が宙に浮いてしまう。強烈な圧迫感に悲鳴に近い声を上げたけれど、先輩はさらに奥へと腰を進めた。

「ほら、美月。見て？」

掠れた声で促され、視線を動かす。すると持ち上げられた足の間から、ぬかるんだ秘部をゆっく

りと往復する『彼自身』が見えた。

「は……、ナカ、すごいことになってる。俺のを啜え込んで、もうぐちゃぐちゃだ」  
「やだやだ、言わないで、ああ、いや……あ……っ」

とつさに視線を逸らしたものの、生々しい光景が目には焼きついてしまった。それは薄暗い照明でもわかるくらい蜜に濡れていて、光っている。

さすがにこれは刺激が強すぎる。それに、この体勢も正直しんどい。

「もう、やだ、ふっ、……んん、う」

抗議の声は、先輩の唇に吸い込まれた。

憧れの人に、淫らな自分を晒け出すなんて。でもそれ以上に、悦んでいる自分がいた。

全身を押しつけるように何度も奥へ侵入され、貫かれるたびに身体がベッドへと沈み込む。自分の嬌声が、深い口づけによって消えていく。息苦しいはずなのに、熱い唇と舌の感触はひどく心地よかった。

このまま彼に喰らい尽くされてしまいそう。

いや……いっそ、このまま食べられてしまいたい。

「先輩、もっと……して？」

離れた唇が名残惜しくて懇願すると、先輩の動きがびたりと止まり、チツと小さく舌打ちされた。

——どうしよう、私、怒らせるようなこと言っちゃった？

欲しかったのはキスだったんだけど、どうやら伝わらなかつたらしい。失言だったかもしれないと顔を強張らせたが、もう、遅かった。

「煽ったのは、そっちだから……」

「ち、ちが……あ、いや、あっ、ああ……っ」

その言葉を合図に、抽送のスピードが上がっていく。部屋には、ぐちゅぐちゅという淫らな音が響いた。

「ああっ！ だめっ……だめえっ……！」

苦しいほどの衝撃が、私を否応なしに快樂の淵へと追いつめる。抗うように背を反らせば、硬く尖った乳首を存分に舐め上げられた。

「いや、もう……お、おかしくなっちゃう、もう、許して……っ」

ぴんと伸ばしたつま先から、電気のような痺れが走る。身体のおちこちで湧き上がっていた快感が波打ちながらひとつの白い渦になり、みるみるうちに膨れ上がる。

「やだ、やだあ、変になる……っ、ああ、あんっ！」

得体の知れない大きな波から逃げようとして身体を振ると、腰を掴まれ強く引き寄せられた。

「いいよ……変に、なって？」

「せんば、い……、ああっ、も……、ダメエ……！」

「先輩じゃない……——輝翔」

「ああっ、あ、輝翔さん……っ……ああっ、あああああ——っ!!」

先輩の名前を叫んだ途端、目の前が真っ白になり、私は背中を大きく反らしながら絶頂に達した。「く……っ……う」

ほぼ同時に、先輩の身体が私の上に落ちてきた。

脱力した私は何も考えられず、ただ快感の余韻に浸る。

苦しくて、切なくて、でも愛おしくて。

身体を覆い尽くす熱が、私のすべてを麻痺させる。

こんな気持ち、知らなかった。

ずっと、手の届かない人だと思っていた。

恋をしてはいけない。そうわかっていたいながらも、ずっと心の奥底で求めていた人。

その彼に、こんな風に抱かれる日が来るなんて。

少しの後悔とそれ以上の幸せを噛みしめて、私は眠りについた。

——私の憧れだった、輝翔先輩。

どうして私が先輩と一夜を過ごすことになったのか。

事のはじまりは、ちょうど一週間前にさかのぼる。

\*\*\*\*\*

「お疲れ様です」

「お疲れ様でした」

エントランスの脇に立つ警備員さんに挨拶をして、入り口の自動ドアをすり抜ける。

もうすぐ二十時だ。

すっかり暗くなつた空を見上げて、羽織っていただけのジャケットのボタンを留めながら私は足

早に会社をあとにした。

私は、羽田はたの美月二十三歳。

今年の春に大学を卒業し、現在、株式会社SUZAKI商事の総務部総務課に勤務する社会人一年生です。商社ですよ、商社!! なんの取り柄もなく、運よくエスカレーター式の高校に入ってなんとか大学まで卒業することができた、この私が!

……まあ、コネですけど。

SUZAKI商事では主に食品関係の輸出入を行っているが、私はそんなグローバルでワールドワイドな業務には従事していない。

私の所属する総務課は、一言で言うならば『なんでも屋』。他部署の仕事が円滑に進むようサポートし、従業員の満足度向上に努めることが仕事です。

せつかくの商社勤めなのに、と思うことなかれ。もともと人のお手伝いをするのは好きなので、今の仕事にはやり甲斐を感じている。まあ、まだまだ新人なので、他の優秀な社員さんみたいに重要なお役目を賜ることはないけれど、今日はたまたま他部署でちょっとしたトラブルがあり、私も少しだけお手伝いさせてもらった。

ただ、そのせいで残業になってしまったのは、計算違いだった。

信号待ちをしながら、待たせている相手にメールを送る。

金曜日の夜。いつもだったたら、まっすぐ自宅に帰るか、気の合う友達と遊びに行く私だけど、今日は食事会。ちなみにコンパではありません。

このたび四つ年上の兄、羽田野悠一が結婚することとなりました。

親族の顔合わせは済んでいるし、婚約者の沙紀さんとは以前から親しくさせていただいている。

今日は、その兄たちとの食事会です。

兄たちだけでなく、もう一人、重要なお客様がいらっしやるので、自然と早足になる。

軽く息も上がる頃によくやくたどり着いた居酒屋は、大勢のお客さんで賑わっていた。店の人名前を告げると、一番奥のお座敷に通される。

「遅くなりましたっ！」

「美月ちゃん、お疲れ様。遅くまで大変だったね」

「遅いぞ美月、いつまでチンタラ仕事やってんだ!？」

小上がりのお座敷は襖が閉められていて、個室のようになっていた。沙紀さんと兄は、ジョッキ片手にすでに盛り上がり中。

そんな二人の向かいに、仕立ての良いグレーのスーツを着こなした、端正な顔立ちの彼の姿があった。

くつきりとした二重の大きな目に優しい光を宿して、彼はにっこりと微笑んだ。

「お疲れ様、美月ちゃん。消えてしまったデータの再入力手伝いだろう？ 大変だったね」

「――輝翔先輩……っ！ いえ、専務。お疲れ様です」

そのお言葉だけで疲れが吹き飛びます！

須崎輝翔さん。私が勤めるSUZAKI商事の専務であり、私の憧れの人。

輝翔先輩とはじめて会ったのは、私が中学一年生の時。

先輩はまだ高校生だったけれど、すでに大人の男性の雰囲気醸し出していた。

それもそのはず。先輩は、SUZAKI商事を取り仕切る須崎グループの跡取り息子で、いわゆる御曹司。エスカレーター式の名門校に幼稚舎から通っている、筋金入りのお坊ちゃまだったのだ。

ついでと言ってはなんだけど、うちの父は須崎グループの顧問弁護士をしている。父の跡を継ぐ予定の兄は、将来、自分のボスになる先輩と同じ中学に入学。以来、親友、あるいは仕事上のパートナーとして、公私にわたる付き合いが続いている。

一方、頭の出来の良い兄に比べて、私の成績は至って普通。父のDNAはすべて兄に受け継がれ、私は一般家庭で平々凡々に育った母に似たらしい。

とはいえ、別にそのことにコンプレックスを抱いたりすることもなく、お兄ちゃんは大変だね、くらいにしか思っていないかった。

けれども、あの日。はじめて会った先輩に、私は一目で惹かれた。くつきりとした二重の大きな目。

太めの眉は力強いものの、決してくどくはなく、男らしい。

色白の肌、小さめの厚い唇。

センターより少し右側から流した前髪と、襟足のちよつとはねた髪型は、清潔感がある。

そして、全身から溢れる知的で上品なオーラ。

まさに、王子様だった。ふわっとした栗色の頭の上に王冠を載つけて、白タイツで白馬に跨またがっていたとしても、私はちつとも違和感を感じませんよ!!

「君が美月ちゃん？ はじめまして、悠一君の友人の須崎輝翔です。よろしくね」

高すぎず低すぎず、期待を裏切らない素敵な声にも心を奪われる。差し出された手は白くて綺麗で触り心地がよく、初対面の中学生のお子ちゃまにまで律儀に挨拶あいさつしてくれるところに、品を感じて……

私はすっかり虜もがになってしまった。

先輩に少しでも近づきたくて、彼や兄と同じ私立高校を受験することを決意した私は、中学の三年間、猛勉強した。

先輩は私より四つ年上なので、私が入学する頃には卒業している。ただ、ちよつとでも繋つがりか欲しかったのだ。不純な動機だったけれど、何も知らない家族は、必死に勉強する私を応援してくれた。その上、先輩と兄は家庭教師までしてくれた。

おかげさまで無事に高校に合格し、晴れて私は『親友の妹で高校の後輩』となった。

しかし、それから特に大きな出来事などなく、私は大学に入学。そして四年生になり、就職先に迷っていた時に声をかけてくれたのが先輩だった。

先輩は大学を卒業したあと、須崎グループの中核企業のひとつであるSUZAKI商事に入社し、専務に就任していた。

「迷っているなら、うちにおいでよ」

その一言で、私はあっさりと就職先を決めた。専務の知り合いで、顧問弁護士顧問弁護士の娘。これが私のコネである。

だけど、勘違いしないでほしい。確かに私は先輩に対して好意を持っているけれど、それは決して恋愛感情なんかではない。

たとえるならば、アイドルに対する憧れのようなもの。

——だって彼は、私なんかじゃ手の届かない、雲の上の人なのだから。

王子様は今、ビールのジョッキをあおりつつ、焼き鳥に舌鼓を打っていた。

私は促されるまま、先輩の隣へと腰を下ろす。

すぐ傍に先輩の気配を感じて、私はドキドキしながらチューハイを注文した。

やがて店員が運んできたチューハイを先輩が受け取り、私に手渡してくる。その時、指先が少し触れた気がして、顔が赤くなったかもしれない。固まっている私を気遣うように、先輩は近況なんかを尋ねてくれた。

「総務の仕事はどう？」

「んー、大変ですけど、やり甲斐はあります」

私がやっている仕事は、お茶出しやコピー取り、郵便物の配布、切れた電球の交換、観葉植物への水やり……、はつきり言って、誰でもできる仕事。

けれど、今日みたいに他部署で何かあった時はサポートとして駆り出されたり、他の仕事をしている先輩たちのお手伝いだってする。要するに『なんでも屋』だ。

専業主婦の母より受け継いだDNAなのか、私は昔からそういう細々とした仕事が好きだった。だから学生時代は、生徒会や文化祭の運営委員なんかを好んでやっていた。

「……やっぱり、総務課じゃなくて秘書課に入るべきだったかな？」

「いえいえ、私には無理ですよ！」

顔の前で手をぶんぶんと振り、先輩の言葉を否定しつつ、顔のほてりをあおいだ。

秘書課は、総務部の中でも花形部署のひとつ。そこに所属するお姉さまたちは皆、才色兼備で、私なんかが入ったら違う意味で目立ってしまう。

だけど、本当は秘書課に憧れていた。新入社員の私は、社内で先輩に会うことなんてほとんどない。ただ、もし役付きの秘書になれば、仕事中の先輩の姿を好きだけ見ていられる。そう思って秘書検定を取得したものの、秘書課のお姉さまたちのレベルの高さを見てすぐに諦めた。

知性も足りない、美人でもない私には、書類を抱えて社内を走り回っているくらいが丁度いい。

「美月ちゃんをよく気がつくし、秘書向きだと思っただけだね？」

ふいに向かいの席から声がかかる。顔を向けると、沙紀さんがにこやかに微笑んでいた。

沙紀さんは、兄や先輩と同じ大学を出ていて、私より三つ年上。垂れ目がかわいい、ふんわりとした美人さんだ。清楚で落ち着いた印象なんだけど、兄曰く天然ボケなところもあるらしい。かと思えば、時々妙な色気を醸し出すことがあって、女の私でもドキッとさせられることも。

彼女はバッグからリボンのかかった小さな箱を取り出すと、私に向かって差し出した。

「沙紀さん？」

「この前、お誕生日だったんでしょ？ 遅くなってごめんね。いつもお世話になっているから、

感謝の気持ちです」

「……ありがとうございます！」

沙紀さん、あなたのほうがよっぽど気がつく人です。



箱の中身はかわいらしいピアスで、私の誕生石のサファイアが控えめに輝いていた。うん、そのセンスも素敵です！

「……そうか、そういえば、誕生日だったね」

もらったピアスをうきうきと眺めていたら、先輩が呟いた。

「ごめんね？ なんにも準備してなくて。今度、何か用意するから」

「いえいえ！ 気にしないでください！」

先輩から誕生日プレゼントなんてもらったら、私、卒倒しちゃいますから！

慌てふためいている私をよそに、兄たちはクスクスと笑う。

「美月、もらっといたほうがいいぞ？ 須崎グループの御曹司からのプレゼントは、庶民がそうそう手に入れない高価なものだろうから」

呑気な兄は、高級ブランドの名前を次々と羅列する。そして、私も欲しいなく、なんて言う沙紀さん。だけど、私はそんなのちつとも欲しくない。

「……そんなもの、いりませんからね？」

御曹司からの高価なプレゼント。

確かに魅力的ではあるけれど、私には必要ない。

だって、そんなものをもらったら、ますます先輩が遠い人に思えてしまうから。

先輩は、私とは住む世界の違う人間だとわかっている。でも、こうやって一緒に庶民的な居酒屋

でビールと安価な料理を摘まんでいれば、少しは親近感が湧くというものだ。

私は話題を変えようと、兄たちに話を振った。

「沙紀さんみたいな人がお義姉さんになってくれるなんて夢みたい。本当に、うちの兄なんかでいいんですか？」

「なんかとはなんだ」

二人の馴れ初めは大学時代にさかのぼる。沙紀さんに一目惚れした兄が積極的にアプローチして、付き合うことになったのだそうだ。はじめて沙紀さんを紹介された私が、『お兄ちゃん、面食い……』と呟いたの言うまでもない。

学生時代、そこそこモテていたという兄。大企業の顧問弁護士の子で、背も高いし、顔も、まあ、見れないことはない。だけど、傍らにいつも噂の御曹司がいるのだから、普通であればそちらに目が行ってしまうだろう。

「出会った時から、悠一さんと結婚するって決めてたもの。私も、美月ちゃんみたいなかわいい妹ができて幸せよ」

言われたほうが赤くなってしまうような言葉を口に出しているにもかかわらず、沙紀さんはちつとも恥ずかしくない。なんだか、無性にかっこよく見えた。

兄は大学在籍中に司法試験に合格し、卒業後、司法修習を経て弁護士になった。まだまだ駆け出しで、今は父の事務所で働いている。私には難しくてよくわからないけれど、バッジをもらったら

即弁護士として独立できるような甘い世界ではないらしい。

ちなみに沙紀さんは今、兄と同じく父の事務所で事務の仕事をしている。父は、私が大学を卒業したら事務所を手伝わせるつもりだったようだけれど、その役に就いたのは沙紀さんだった。

「どうやらその時点で、二人の結婚は決定事項だったみたいだ。」

「美月ちゃんは何？ いい人いないの？」

「いません、いません。今は仕事で恋人ですから」

「ちょっとだけ胸が痛んだのは、きつと気のせいだ。大学四年の時、私にも彼氏というものがいた。だけど数ヶ月であっけなく別れてしまった。」

「浮気をされたとか、他に好きな人ができたとかいうわけではなくて、お互い就職活動や卒論などで忙しくなり、自然消滅してしまったのだ。はつきりフラれていけば、こんな風にモヤモヤせずに済んだのかもしれない。」

「結婚式のブーケは、美月ちゃんにあげるからね」

「おいおい、美月よりも、輝翔にあげたほうがいいんじゃないか？」

「婚約者と親友に挟まれて上機嫌の兄は、少し酔っぱらっている様子。どうしてブーケを男の人にあげないといけないのさ。」

「お前もそろそろ身を固めろとか言われはじめる頃だろう？」

兄の言葉に、思わずチューハイを口に運ぶ手が止まった。

「そういえば、輝翔さんは今、誰かとお付き合いしてるの？」

沙紀さんの言葉にさらに固まる。だけど先輩は笑顔でさりりとかわした。

「今は、そんな相手いないよ。俺が、結婚もいなくなって思えるように、二人で幸せなところを見せたくれよ？」

——内心ホッとした。社内では先輩は女子社員たちの憧れの的で、熱心なファンも大勢いる。私もそのうちの一人ではあるけれど、これでも立場をわきまえているので、表立って騒いだりはしない。本当のファンは、スターの動向を温かく見守るものです。

「だけど、自然と情報は耳に入ってくるわけで……秘書課のなんとかさんや受付のなんとかさんが、専務の恋人の座を狙ってあれやこれやとアプローチしているみたい。ただ、私が入社して以来、専務に恋人がいるというような話を聞いたことはなかった。まあ、昔の恋人について聞くことはあられるけれど。」

それは当然だ。須崎グループの御曹司おんせうしの相手ともなれば、家柄も容姿もそれ相応の女性を選ばれるはず。一介の社員なんかは手を出すわけがない。

「じゃあ、フリー同士で美月ちゃんと付き合ってみたら？」

突然、沙紀さんがそんなことを言い出すので、ようやく口に入れたチューハイを思わず噴き出しそうになってしまった。ああ、沙紀さん。あなたも結構酔ってらっしゃる。

「な、な、なんてこと言うんですか！ そんなの絶対ダメに決まってるじゃないですか！」

手にしたジョッキをドンツとテーブルに置いて、私は必死に否定した。

私ごときがこの見目麗しい先輩の相手になれるわけないことは、自分が一番理解している。ただでさえ専務の周りには美女が盛りだくさんなのに、私が選ばれるわけなどない。

私があんまり必死に否定したためか、兄と沙紀さんは二人そろって苦笑いを浮かべている。こういうところは似たもの同士なんだから。

「……俺と付き合うのが、そんなに嫌かなあ？」

目の前の二人にいろいろ文句を言い立てていたら、隣に座っている先輩も苦笑いを浮かべた。

そういえば隣に当事者がいたことをすっかり忘れていた。いくら相手が私とはいえ、こんなに必死に抵抗されては気分を害したかもしれない。

「俺は、美月ちゃんなら大歓迎なんだけどね」

優しい先輩は、さりげなく気遣いなんかを見せてくれる。さすが紳士。

「いえいえ！ 私なんかと付き合ったら、先輩の経歴に傷がつかますから！」

第一、先輩の彼女になるということは、須崎グループの御曹司と付き合うということ。ただの平社員の私では力不足なのです。それに——社内で大勢いる専務の熱心なファンのお姉さまたちを敵に回すかと思うと……ゾツとする。ようやく仕事にも慣れて楽しくなってきたのに、そんなことになつたら私の平和なOLライフが台無しになってしまうじゃないか。

「先輩、結婚する時は、私も式に呼んでくださいね。でも……ご祝儀はまけてください」

私は作り笑いを浮かべて、最後に茶目つ気のあるフレーズを付け加えた。穏やかではない胸中をなんとか隠すことができたと思う。

先輩だつてもう二十七歳になるのだから、そんな話が出てもおかしくはない。

いつかきつと、そんな日が来るのだろう。

白いタキシード姿の先輩の隣に立つ、純白のウエディングドレスに身を包んだ美しい花嫁。その女性を思い浮かべても、顔にはモヤがかかっている。

——本当は、ちよつとやだ。

私のものにはならなくていいから、誰のものにもならないで……

先輩の花婿姿なんて、当分は見たくない。

それが私の本音だつた。

週が明けた月曜日。総務課の隅にある私のデスクのパソコンに、一通のメールが来ていた。それは社内メールで、送信元は専務室から——つまり、先輩からだった。

こうして直接メールをもらうのは、はじめてだ。

私は挙動不審なくらいきよるきよると周囲を見回しつつ、そのメールを開いた。

『プレゼントを考えたので、時間がある時に連絡して』

短い文章のあとには十一ケタの数字と、アットマーク付きの英数字が添えられている。

こ、これは……先輩のプライベートな携帯番号と、メアドではないですか！

あまりの驚きで思わず椅子から飛び上がりかけたけれど、そんな派手なことをしたら注目を浴びてしまう。同僚に見られるのは非常にまずい。

携帯番号とメアドを素早くメモして、間違いがないか三回見直した。それからメールを削除して、ゴミ箱フォルダからも消去する。誰にも気づかれないことなく証拠隠滅したあとで、私は小さくガツツポーズした。

みんなが憧れる専務様の携帯番号とメアド。これだけで充分すぎる誕生日プレゼントですよ？

月曜の朝からテンションの上がるサプライズがあつて、俄然がぜんやる気が出た。さっそく仕事に取りかかるため、まずはいつものように給湯室へと向かった。

私は毎朝、部署のみんなにお茶を淹れている。うちの会社には女子社員がお茶を淹れる習慣などないんだけれど、『お茶出しは下っ端の仕事だ』と父に教え込まれたので、ついやってしまう。それに、みんなが少しでも気分よく仕事をスタートできるのであれば嬉しいじゃないか。

ヤカンを火にかけて、お湯が沸くまでの間に、湯飲みやマグカップを準備する。年配の課長は緑茶派で、それ以外はコーヒー。各人のミルクや砂糖の好みも、おおむね覚えた。本当はカップも温めたいところだけれど、時間がないので省略する。

手早く準備をしていると、先輩たちが入ってきた。

「おはよう、羽田野ちゃん」

「おはようございます、太田さん」

太田さんは、私の教育係をしてきている、一年上の頼れる先輩。面倒見のよい姉御肌で、まさにデキる女といった感じだ。

「おはよう。悪い、遅くなっちゃった。いつもごめんね？」

太田さんの後ろから顔をのぞかせたのは、黒木くろきさん。太田さんと同期入社で、我が部署のムードメーカー。とても優秀で、彼女の情報処理能力は男性社員からも一目置かれていたりする。

「おはようございます。いえ、好きでやってますから」

二人はいつも、お茶やコーヒーを運ぶ時に手伝ってくれる。私が好きでやっていることなのに、こうして手を貸してくれる、ありがたい先輩方なのです。

「でも、羽田野ちゃんのお茶は美味しいって、課長が喜ぶのよね……まあ、家で反抗期の娘さんに口をきいてももらえないから、さみしいんでしょうけど」

黒木さんは社内でも顔が広く、情報通だ。課長の家庭の事情にまで詳しい理由は謎だけど。

「その課長が御用みたいだから、これは羽田野ちゃんが持つていってね」

そう言うって太田さんは、課長の湯飲みが載ったお盆を私に渡した。

課長が私に？ 思い当たることは特にないけれど……

——もしかして、金曜の夜に専務と一緒に飲んでいたのを誰かに見られたか？！

思わず背筋がゾツとした。目に浮かぶのは、専務ファンの怖いお姉さまたち。いくら個室のある居酒屋を選んでもらったとはいえ、壁に耳あり障子に目あり、と言うし。

私はビクビクしながら、お盆を持って課長の席へと向かった。

「おはようございます、課長」

「ああ、おはよう、羽田野くん。いつもありがとう」

課長は湯飲みを受け取ると、緑茶をズツと一口飲んだ。

「羽田野くんの淹れたお茶は美味しいね」

「ありがとうございます。小さい時から、母に教わっております」

専業主婦の母は、ミドルライフを謳歌している。近所のカルチャースクールに通いつめては、お茶や生け花、ガーデンングなど多種多様な習い事に精を出し、最近では三味線や水墨画まではじめってしまった。そして習ったことを家で実践披露するため、おのずと私も身に着くのだ。

「さて羽田野くん、今日はちょっと秘書課のヘルプに行ってくれないか？」

課長の御用は、秘書課のお手伝いに行けという内容だった。今日は会議が重なっているらしく、給仕係が足りないので応援を依頼されたのだそうだ。

ああ。先輩のことじゃなくてよかった！

「お茶に関しては羽田野くんが適任だから。しかも喜ばない。専務が出席する会議だぞ？」

五十歳のおじさまがウインクするのはどうかと思います、課長……。ともあれ、女子社員憧れの専務を間近で見られるのは、それほどの特典なのだろう。素直に喜ぶ一方で、プレッシャーを感じる。

「了解しました！」

これも仕事だ、行くしかあるまい。わざとらしく敬礼なんかして、自分を奮い立たせる。働く先輩の姿なんて滅多に見られるものではないし、大人しくしていれば問題ないだろう。

専務の出席する会議のお手伝いということで、太田さんと黒木さんには心底羨ましがられた。

うまくいけば玉の輿よ、なんて言われたけど、たかが会議のお手伝いでそれはオーバーというものだ。

「私、玉の輿には興味ありませんから」

本心だったのに、二人は驚いていた。そりや、女の子だから一度はシンデレラに憧れたりもしたけれど、庶民がいきなりセレブになれるわけないでしょう？ しかも先祖代々続く由緒正しいお家に嫁ぐとなったら、苦労するのは目に見えている。意地悪なお姫様みたいな人とも付き合わなぐちやいけないかもしれないし、ソファで寝ころがってテレビを見たり、休みの日にパジャマでゴロゴロしたり、こたつに入ってボーっとしたりもできなくなる。

いかにもぐうたらな感じだけれど、私には庶民の生活が合っているんです。

そう力説すると、先輩方は苦笑した。

「言われてみれば、そうねえ……ま、目の保養だと思って頑張つてね」

やや残念な子を見るような目で見送られながら、私は自分のデスクをあとにした。

秘書課のフロアは会社の最上階にあり、各役員の部屋とも近い。うちの課とは違って、入り口には木製の立派な扉が構えていたりするから、余計に緊張するんですけど。

「失礼します。総務課からお手伝いに来ました、羽田野です」

重々しい扉の先は、想像と違って意外と狭かった。この階で最も広いのが社長室で、次いで副社長室、専務室、常務室となる。それぞれの部屋の扉とは別に、秘書課のフロアから直結している秘密の通路があるらしいんだけど、ざっと見回した程度ではわからない。

室内にいたのは、十人程度。部屋の真ん中あたりがパーティションで区切られている。手前にいる人たちは、私と同じタータンチェックのベストに紺のタイトスカートという会社の制服を着ているのに対し、奥にいる人たちはスーツ姿だった。

つまり、奥にいる人たちが役付きの秘書さんで、手前にいる制服姿の人たちは部署ごとに割り当てられたグループ秘書さんってわけだ。

雑然としている総務課と違ってきちんと整備された秘書課は、どこどなく格式高く感じる。一度は夢見た部署なだけあり、怖さもあるが、憧れも大きい。

先日、沙紀さんから秘書に向いてるなんて言われたりしたもんだから、ついスーツ姿の自分を想像しちゃったりなんかして。

ブランド物のパリツとしたスーツに身を包んだ私。立派なデスクに座ってパソコンに向き合う先輩に『専務、コーヒーお持ちしました』と話しかける。もちろん自画像は三割増し。

先輩の横に立つなら、やつぱりそれ相応の美人さんじゃないと、見劣りするよなあ……

「羽田野さん、お待ちしてました」

おっと、本来の目的を忘れていた。我に返った私の目の前には、いつの間にか担当の秘書さん(制服組)が立っていた。

「担当の村本と申します。本日はよろしくお願ひします」

村本と名乗った女性に軽く挨拶すると、さっそく業務内容の確認に入った。

……本当はもう少し、妄想に浸りたかったんだけどね。

とりあえず、お茶出しと資料配布を手伝って、あとは会議室のセッティングと後片付けをすればいいらしい。

会議室は秘書課のあるフロアのひとつ下。さすがに一人では、人数分の資料や湯飲みを抱えて移動するのは大変だ。

預かった資料をコピー機にかけて、人数分プラス予備の湯飲みと茶卓を用意して会議室へ移動し、机や椅子をセッティングする。

課長が大きな会議が重なっていると聞いていたけれど、どれも重要な会議らしく、スーツ部隊の秘書さんたちは社長や副社長の出席する会議に駆り出されているらしい。

「秘書課って、少人数な部署なんですね」

「そうなのよ。本来ならもう一人専務付きの秘書がいるんだけど、社長の秘書も兼任してるから、今日はそっちに行ってるの」

村本さんの話によると、どうやら先輩にはまだ専任の秘書はいないみたい。ベテランの秘書さんが兼任でお世話しているようだ。

「じゃあ、村本さんたちにも専務の秘書になるチャンスがありますね？」

村本さんは三十代くらいだろうか。秘書課の中では割と年上のほうだと思う。左手の薬指に指輪をはめているので、既婚者だとわかった。

彼女は浮かない顔で、溜め息をつきながら首を振った。

「専務はすつごく厳しいの。だからあの人の秘書は、余程できる人か、専務に気に入られた人じゃないと続かないと思うわ。実際何人が就いたけど、すぐに外されたのよ。若い女の子だと明らかに専務を狙っているのが態度に出ちゃってね」

……それは意外だった。仕事中の様子は知らないけれど、少なくとも私の知っている先輩は、温和で穏やかな性格だ。未来の経営者ともなると、仕事には妥協しないものなんだな。

クールな先輩もちよつと見てみたいなんて思ってしまったのは、ここだけの話。

コピーできた資料をホッチキスで留めてセットしているうちに、会議室には続々と人が集まりはじめた。

その中でも一際目立つ専務は、会議室の隅に立つ私を見ると一瞬だけ目を大きくして、ふっと優しい目をした。

今日の先輩も素敵です。光沢のある紺色のスーツに水色のシャツ、ピンクパープル系のネクタイ。どれも一流ブランドなのだろうけれど、さりげなく着こなしているところはさすがだと思う。

臆することなく上座に座り、年上の役員とも堂々と話している。やっぱり、生まれながらにして上に立つ人間なんだな。

本当は先輩にお茶を持っていきたいところだけれど、上座は正規の秘書である村本さんのテリトリーだ。私は彼女がお茶を配りはじめるのを確認して、下座の人たちのほうに回った。

「ありがとう」

何人目かにお茶を出した時、突然声をかけられた。

課長と同じくらいの年頃の、中年のおじさまである。

「……いえ。お茶の位置は、こちらでよろしかったですか？」

事後確認でも、おじさまはにこやかに笑ってくれる。

お茶の出し方にもいろいろとパターンがあり、今日みたいに資料を片手にペンを使う場合は、左側に置いたほうが飲みやすい。だけどその人が左手にペンを持っていたので、私はあえて右側に置いたのだ。

「よろしければ、右上を留めた資料もご用意していますので、そちらにいたしますか？」

「ああ、じゃあそうしてもらえるかな」

用意した資料を手渡すと、おじさまに再度ありがとうとお礼を言われた。私の表情も、自然な笑顔になる。

左上をホツキスで留めた資料は、右利きの人には都合がいいけれど、左利きだとページをめくるのが面倒だ——左利きの父が常々そんな文句を言っていたので、予備のうちの一部は右留めにしたものを用意するようにしている。

余計なおせっかいかもしいないけれど、喜んでもらえてよかった。やっぱり、せっかくお手伝いするなら、相手に気持ちよくなってもらいたいもの。お・も・て・な・し、の心というやつだ。

「今日のお茶は一段と美味しいですね」

会議室を出ようとした時、先輩のそんな声が聞こえた。

無事にミッションをクリアした私は、一足先に会議室を出た。正規の秘書である村本さんは、少しだけその場に残って資料の不備がないか確認するそうだ。あとは片付けを手伝えればよいだけなので、会議が終わるまでは総務課に戻ることにした。エレベーターホールに向かうと、ちょうど到着を告げる音が鳴った。

開かれたドアの先に、思わず目がいく。

エレベーターから降りてきた女性は、明らかにオフィスには似つかわしくない格好だった。

艶やかな黒髪は肩の下まで真っ直ぐ伸びて、パステルカラーのグリーンのワンピースに白のレースのボレロは清楚な雰囲気を実際立たせている。色白の頬はピンクのチークで染められ、くるんとカールしたまつ毛が印象的だ。

ここが街路樹の下のオーブンカフェだったとしたら、きっと通行人の目を惹くだろうが、オフィス内ではいささか場違いな服装だと思う。

「あのう……？」

しばらくその場に立ち尽くしていた私は、相手の声で我に返った。

いけない、いけない。初対面のお客様を凝視するのはマナー違反だ。



粗相のないよう営業用の笑みを張りつけると、彼女は小首を傾げながらも安心したように微笑んだ。

「須崎専務は、どちらにいらっしやいますか？」

その言葉に、笑顔が凍りつく。

そりゃ、専務ともあれば訪ねてくるお客様も多いだろうさ。御曹司おんそうしなんだから、関わりのある人たちはそれなりのステータスを持つ人だということもわかる。彼女だって、どこをどう見てもお金持ちのご令嬢だ。

だけど、仕事上のお付き合いがある人じゃないよね？

このお嬢様の服装は、明らかにデート用。

だとすると、この人は、先輩の……

「あとう……？」

固まっている私を、お嬢様は怪訝けげんそうな表情で覗き込む。うう、やっぱり、まつ毛が長い。唇も、ぶるぶるしていて柔らかそうだ。

「専務でしたら、あちらの会議室で会議中ですが……。専務を待たれるのでしたら、一階のラウンジか応接室にご案内いたします」

先輩のいる会議室からこの人を遠ざけたくて、そう申し出た。

彼女が会いたがっている専務は、今真剣に仕事をしている。私だって、誰でもできる仕事とはい

え、社会人として責任を持って働いている。それなのにこの人は、デート感覚で先輩に会いに来た。そのことに無性に腹が立った。

「いえ、結構です」

しかし、お嬢様は満面の笑みで私の申し出を断ると、廊下の隅に置かれたソファに腰を下ろした。そして頬を赤らめ、眩まよしそうに目を細めながら呟つぶやく。

「一刻でも早く、あの方にお会いしたいの」

それは、社会人として、なんて偉そうに考えていた私の思考をあつという間に停止させる破壊力を持っていた。

キラキラと輝く彼女の横顔は、恋する乙女そのもの。好きな人のためにおしゃれをして、彼に会うまでの時間さえ楽しんでるその姿は、地味な制服に身を包んだ私とはあまりにもかけ離れたものだった。

殺風景な廊下で、あざやかに輝くお嬢様と使用人のような私。舞踏会に向かうために綺麗に着飾る義姉あねたちを見守るシンデレラも、まさにこんな心境だったのかもしれない。

眩しすぎるものを見たせいか、目の前が暗くなった気がする。それとともに、心の中まで黒くどろどろとした感情に覆われていく。

「……失礼ですが、専務とどのような関係ですか？」

気がついた時には、掠かすれた声で質問していた。

お嬢様は、不思議そうな顔でこちらを見ている。面識のないただの平社員風の私にこんなことを聞かれて、驚いているのだろう。

しばらくして、お嬢様は長いまつ毛を伏せながら、照れたように答えた。

「輝翔さんとは、いいお付き合いをさせていただいております」

恥ずかしげにしているのに、その表情が勝ち誇ったものに見えてしまうのは、私の邪心のせいなのかもしれない。

「……失礼しました」

先輩からメールが届いてテンションが上がり、秘書課のお手伝いも無事に果たせたのだから、本来ならばもっと晴れやかな気持ちでいたはずなのに……

いたたまれなくなった私は、逃げるようにその場を去ることしかできなかった。

総務課へ戻った私は、そのまま給湯室へと駆け込んだ。

専務の相手ともなれば、きつと由緒正しい家柄の方なのでしょう。綺麗な黒髪の彼女は、和服も似合いそうな大和撫子に見えた。

一方、流し台の脇にある鏡に映った私は、ひどく情けない顔をしていた。

「一丁前に、失恋したような顔してやんの」

鏡の中の自分に呟いてみても、ひどい顔は変わらない。

先輩に恋をしているわけではないと言い聞かせつつ、どこかで期待していたのだろうか。私はただの平社員であり、先輩にとっては親友の妹でしかない。先輩の彼女に会って傷つく権利なんか、私にはないのに。

私は、秘書課のみなさんみたいなバリバリのキャリアウーマン風美人でもなく、清楚なお嬢様でもない。

軽い印象になるよう抑えめのブラウンにカラーリングした髪は、仕事の邪魔になるので後ろでひとつにまとめている。どうせ崩れるからと簡単なメイクしかしていない顔は、大和撫子とは程遠い丸顔の童顔。天然ものの二重まぶたではあるけれど、くつきりぱっちりお目めとはならず。

自分が先輩に釣り合わないことぐらい知っている。容姿もさることながら、家柄だって違いすぎる。いくら父親が須崎グループの顧問弁護士とはいえ、ただの雇用関係ではない。先輩と親しくさせてもらっているのだから、いずれは兄が父の跡を継ぎ、先輩の下で働くからに他ならない。そんなことも忘れていた私は、先輩の優しさに甘えすぎていたのだろうか。

第一、私は先輩に恋なんてしていない。この程度の顔で、そんな身の程知らずなことができるはずもない。

しかし、同じ人間なのにどうしてこうも顔の造りが違うんだろう。やっぱり、この丸顔か？ このぷにぷにしたほっぺのせいなのか？

「……何してんの？」

鏡の前で自分の頬をつまんでむにむに動かしていると、太田さんと黒木さんがやってきた。

「……あ、おひゆかれさまれす」

黒木さんは私の手を掴んで、顔から引きはがす。ああ、ほら、頬のお肉がぷるんとなったよ。

一方の太田さんはスカートのポケットからハンドタオルを取り出し、無言で私の目元に押し当てる。タオル地のふんわりした肌触りが気持ちよくて、まるで太田さんの優しさに包まれているようだった。

「どうした？ 秘書課で嫌なことでもあった？」

「いえ、美人さんにはびっくり会ったので、自分の顔に落ち込んでました」

普通の、明るい声で答えたあと、私は先ほど出会ったお嬢様について話した。

「ああ、その人のことなら秘書課の子に聞いたことがあるわ」

ゴシップ好きな黒木さんは社内知り合いが多い。お嬢様の特徴をちよつと聞いただけですぐに思い当たるのは、さすがと言うべきだろう。

「取引先の社長の娘さんらしいんだけど、最近よく見かけるって」

「うちの会社で？ 何しに來てるのかしら？」

太田さんはわざとらしく肩を竦めたあと、心配そうに尋ねてくる。

「羽田野ちゃん、何か嫌みとか言われたりしていない？」

戻るなり給湯室にこもった私を、二人は心配して見に来てくれたようだ。

「本当になんにもないんです。ただ、どうして私はもつと美人に生まれてこなかったのかと考えていただけで」

頬を引っ張りながら答えると、二人は一瞬目を丸くしたあとにブハッと噴き出した。

「羽田野ちゃんはかわいい系だから、気にすることないわよ？」

「そうだよねえ。小動物系だよねえ。たとえるなら……働きもののねずみ？」

「え——!! ねずみですかあ？」

非常に残念なたとえをされてしまった。だけど二人がケラケラと笑うものだから、私も一緒になつて笑う。

たとえられる動物すら俗っぽいなあ。ちきしょう、いつか噛みついてやる。チュウ。

だけど、働きもののねずみにだってプライドはある。TPOくらいは、わきまえてるんだもん。

仕事をするんだから、華美な化粧は必要ない。そう思いつつも、モノクロの景色の中に咲いた色あざやかな『華』は、私の心に確実に棘を残した。

終了の時刻に合わせて会議室に行くと、さっきのお嬢様が部屋から出てきた先輩に声をかけていた。

「会食の時間には早すぎませんか？」

「ええ、でも待ちきれなくて来てしまいました」

お嬢様はピンクの頬をさらに赤く染め、先輩も優しげに微笑んでいる。

私は二人の姿を視界に入れないよううつむきながら横を通りすぎ、ひとけ人気のなくなった会議室の扉を閉めた。ドア一枚に隔たれた廊下では、先輩とお嬢様が仲睦まじく談笑している。そう思うだけで胸が痛んだ。

頭の中で、先日の飲み会での兄の言葉がリピートされる。

『お前もそろそろ身を固めるとか言われはじめる頃だろう？』

華やかな容姿の先輩とお嬢様は、悔しいけれどお似合いだった。

誰かと並ぶ先輩の姿を見なければならぬ時が、来たのかもしれない。

### 第三話

その日の仕事は、思いの外早く終わった。慣れない秘書課の手伝いに行った私を氣遣って、太田さんと黒木さんが私の分の雑務まで片付けてくれたからだ。

二人に感謝しつつ、定時に退社した私は、いつもより早く帰宅した。就職を機に、私は一人暮らしをはじめた。

駅から徒歩十五分の1DKのアパートが私のお城。もちろん家賃も自分のお給料から払っている。社会人になったのだから、一人前の大人として自立しろと、父に半強制的に追い出された。……アパートと実家は近いけどね。

父が大企業の顧問弁護士をしているのであれば、家はかなりのお金持ちだと思われるかもしれないけれど、実際はそうでもない。

うちの一番の浪費家は、趣味に没頭する母だ。私たち兄妹にやたらと厳しい父は、母にだけ優しい。

まあ、兄妹で私立の学校には行かせてもらったんだけどね。帰り道にあるスーパーで買った食材を使い、簡単な夕食を作って食べた。それからお風呂に入っ

て、部屋着に着替える。すっかりリラックスした私は、その日一日大切に保管していたメモを片手に、スマホとにらめっこした。

もらった直後はテンションMAXだったけど、いざとなるとやっぱり緊張する。連絡先を手に入れたからといって気軽に電話やメールができるほど、私と先輩の間柄は親しいものだろうか。しつこいようだけど、私は先輩とどうこうなりたくないなどと思っていない。誕生日プレゼントだって、本当に必要ない。でも電話なんてしたら、プレゼントを催促しているように思われないかな？ 現在、時刻は二十時を少し回ったところ。まだ仕事かもしれないし、プライベートな時間だとしても……お邪魔かもしれない。

もしかしたら、誰かと——昼間に会ったお嬢様と、デートの真っ最中という可能性だってある。着飾って会いに来た女性とお昼を食べただけでさようなら、なんてありますか？

先輩がそんな軟派な男だとは思いたくないけれど、あれだけハイスペックな人なんだから、彼女の一人や二人や三人いたって不思議じゃない。それこそ、モデルさんや仕事のできるクール美女、清楚で可憐なお嬢様まで、よりどりみどり食べ放題だろう。ねずみ顔の小動物系なんてお呼びじゃない。

……ああ、いかん。また卑屈へくつになってしまった。

——せっかく連絡をもらったのに、お返事しないのも失礼だよね……？

さんざん迷った挙句、私は自分の連絡先を添えて、当たりさわりのない挨拶あいさつとお気遣いなくとい

う内容のメールを送信した。

これでいいんだ。身の程をわきまえている私は、自分と先輩がいかにかげ離れた存在であるかを知っている。叶うはずのない高望みをして一喜一憂するのは、時間の無駄である。

現実世界には、ねずみをお嬢様にしてくれる魔法使いのおばあさんは存在しないのだから。

スマホの画面をぼんやり眺めていたら、タイミングよく電話の着信音が鳴りはじめた。私は反射的に電話に出る。

「はい、もしもし」

『もしもし、美月ちゃん？』

「は、はい!?」

耳に飛び込んできたのは、高すぎず低すぎない、よく通る先輩の声。

慌ててスマホのディスプレイを確認すれば、登録したばかりの輝翔先輩の名前があった。

……反応、早っ！

メールの返事が電話で来るとは思ってもいなかった。あんまりびっくりしたもんだから、声が裏返っちゃった。せめてもう少し心の準備をさせてほしかった……

『こんばんは。今、大丈夫？』

スマホから聞こえる先輩の声は、実際に会っている時よりもさらに近くで響き、私は悶絶もんぜつしかけた。

「こ、こんばんは。大丈夫です、もう家に帰ってます。先輩……いや、専務？　こそ、お仕事の邪魔じゃないですか？」

あー、こういう時にはどっちで呼べばいいのかわからないよ。電話の向こうからは、先輩のクスクスという笑い声が聞こえてくる。まるで耳に直接息を吹きかけられているような錯覚を起こして、首を疎めた。

『今日はもう終わったよ。朝イチでメールしたのになかなか連絡が来ないから、待ってたんだ』

……ああ、すみません！　朝に来たメールに夜までお返事をしないなんて、配慮に欠けておりました！

誰もいない一人暮らしの部屋で、思わず正座して謝ってしまう。

すると先輩は、とても優しい声で言った。

『今日はお疲れ様。おかげで会議もスムーズにできたよ、ありがとう』

たいした仕事もしていないのにお礼を言われるのは気恥ずかしい。それでも、誉めてもらえて嬉しかった。その相手が先輩ならばなおさらだ。

『ところで、美月ちゃん。今度の金曜は何か予定入ってる？』

「いいえ……、ありません」

『じゃあ、その日は空けておいて。誕生日のお祝いに、何か美味しいものでもご馳走するから。店はこちらで予約して、詳細はまたメールするからね。それじゃ、おやすみ』

「あ、はい。おやすみなさい……」

通話終了ボタンを押した私は、そのままベッドへ倒れこんだ。

つ、疲れた……

通話時間はほんの数分だったのに、今日一番の疲労を感じる。

しかも、なんだか強引にお誘いされてしまったような……

物はいらなと言ったから、食事になったのだろう。色気より食い気だと思われたのかもしれない。誕生日プレゼントが美味しいものって、女としてどうなんだろうかと考え、ふと気がついた。

金曜の夜に男の人と二人でお食事ってことは、デート、だよな？

事の重大さにサッと血の気が引き、私はベッドから飛び起きた。

——ど、ど、どうしよう!?　先輩とデートだなんて！

でも、今さら、やっぱり無理です、なんて言えないよお！

しばらくベッドの上で打ち揚げられた魚のようにびちびち跳ねていたけれど、長くは続かない。

手にしたスマホの履歴を見て、不安と同時に、嬉しさと恥ずかしさが入りまじったような感情が

込み上げてくる。

嬉しくないはずがない。だって、中学生の頃から憧れていた人なんだから。

例のお嬢様に対して罪悪感が湧くけど、少しくらいならいいよね？

誰にも迷惑をかけなければいいんだから。

スマホのカレンダーにハートのアイコンを付けたのは、単なる目印。

これは、いつも仕事を頑張っている自分へのご褒美。

先輩にとっては、私との食事が特別なわけじゃない。

だから期待しちゃ、だめ。勘違いしちゃ、だめ。

眠くない目を閉じてベッドに潜りながら、私は何度も自分に言い聞かせた。

——それからの数日間、地に足がついていなかったかもしれない。

火曜日、水曜日、と時間は流れ、私は表向きいつもと変わらず仕事に赴き、誰にでもできる仕事を淡々とこなした。

ただひとつ違うのは、エントランスやエレベーターホール、専務室のあるフロアの廊下など、先輩の姿を少しでも見られそうな場所に率先して足を運んだことだろうか。

あれから秘書課のお手伝いの仕事は入ってこない。もともと仕事中に先輩と会えることは滅多になかったのに、たった一度イレギュラーなことが起きただけでその次を期待するなんて、私も欲張りな人間だ。

そんな私に、神様は警告するのを怠らない。

先輩に偶然会えるのを期待して、電球の交換や観葉植物のお世話をしている私を戒めるかのように、例のお嬢様は決まって私の前に現れた。

……よりもよって、脚立を担いでいたり、植木の剪定という地味な作業をしたりしている時にばかり遭遇するんだよなあ。

頬をピンクに染めたお嬢様は、足取りも軽く私の横を通りすぎていく。彼女は私のことなんて気にも留めない。彼女にとつて、私は廊下の隅に置かれた椅子や植物などと同様、ただそこにあるだけの存在らしい。

先輩からは、あれ以来、なんの音沙汰もない。詳細は追って連絡すると言っていたのに、電話もメールもなかった。

だれど自分から連絡する勇氣はない。お嬢様と自分を比べては自信を失くし、先輩から電話があったのは夢だったんじゃないかと、スマホの着信履歴を何度も確認した。

そんな中、お嬢様の情報は、知りたくなくても勝手に入ってくる。

頻繁に会社に入入りする彼女は、社内でもちよつとした有名人になっていた。

専務を狙っているストーカーだとか、親同士が決めた許嫁だとか——黒木さんが情報を仕入れるたびに報告してくれる。

どれも単なる噂でしかないのに、私には信憑性があるように思えて仕方なかった。おまけに彼女は取引先の令嬢。専務ファンのお姉さま方も迂闊に手は出せず、指を啜えて見守るしかない状況なんだそう。私が恐れるお姉さま方も寄せつけられないなんて。ここまでくると、周りの空気に流されずに我が道を行く彼女が潔く思えてきた。

だから、このまま先輩から連絡がなくても、無駄に傷ついたりはしないでおう。

先輩には、本命の彼女が別にいる。

ただ、先輩が私の誕生日を祝おうと思ってくれたことは事実だ。それだけで私の心は救われる。

——そして木曜日。先輩から待ち合わせについてのメールが来た時、たった一行の文面に歓喜して、心底安堵する自分がいた。

——気がつけばこの一週間、私の頭は先輩のことでいっぱいだった。

こうして訪れた金曜日。私の緊張はピークに達していた。

仕事帰りは先輩とデート……いや、お食事。何を着るかささんさん悩みまくって、ベージュのジャケットに黒とグレーのチェックのワンピースに決めた。

だって一応、通勤服だしね？先輩からは特に服装の指定がなかったから、ドレスコードのあるお店ではないと思う。あまりに気合が入った格好だとおかしいし、だからと言ってカジュアルすぎるのも悪い。木曜は夜中まで一人フアッションショーを練り広げたおかげで、少し寝不足です。

『十八時に地下駐車場で待ってて』

メールで指定された通り、更衣室で着替えを済ませた私は地下の駐車場へ向かう。約束の時間をちよつとだけ過ぎてしまった。

駐車場を利用しているのは重役の方々。入社二年目の平社員の小娘が簡単に足を踏み入れてもい

い場所ではない。人目を気にしてコソコソ階段を下りる私は、泥棒と間違われてもおおしくなかつただろう。

駐車場に辿り着いてきよろきよろしていると、心地いい彼の声が響いた。

「——美月ちゃん」

声の主は黒くて大きい車の横に立ち、おいでおいでと右手を動かす。

国産の、SUVというやつ？車のことはよくわからないけれど、外車じゃなくて意外なようなホツとしたような……

いやいや、先輩が先に来ていることのほうが驚きた。ほんの数メートルの距離を、私は慌ててダッシュした。

「すみません！お待たせして……」

部下に待たされたというのに、先輩はちつとも不快な表情を見せず、にこにこ笑っているのだからちよつと安心した。

本日の先輩は、グレーのストライプの入ったダークスーツに、赤いドットのネクタイ。胸ポケットにはシャツと同じ白色のハンカチーフが挿さされている。清潔感の中にも、できる男のオーラが全開です。

「そんなに待っていないから大丈夫だよ。じゃあ、どうぞ」

そう言っ、先輩は助手席のドアを開けてくれた。



まさかと思っただけど、先輩の運転ですか!? 本当に、こんなところを誰かに見られたら、月曜から出社できないな……

なんてことを考えていたら、薄暗い駐車場に靴音が響いた。

コツコツという高い音は、ハイヒールの奏でる音。

焦った私は、そのまま身を屈めて車のドアで身を隠した。

たどえるなら、『頭隠して尻隠さず』? ……我ながら間抜けな体勢だ。

近づいてきた足音は、すぐ近くまで来るとびたりと止まった。

「こんにちは、輝翔さん」

その声には聞き覚えがあった。

そこに立つ女性は、きつと、艶やかな髪を真っ直ぐにブローし、チークで頬を染めて、くるんとカールしたまつ毛をしばたかせていることだろう。

「どうしました? 今日はず定は入っていませんが」

「あら、ご迷惑でしたか?」

——迷惑です。などという突っ込みは口にできない。

静かな駐車場に響く男女の声と、中腰の私。……どう考えても迷惑をかけているのは私のほうだ。これは世に言う、修羅場でしょうか?

彼女には、隠れきれない私の姿が見えているはず。顔は見えないとはいえ、私が女であるこ

とは服装でわかる。お嬢様の立場からすると、浮気相手を見つけた本妻といった心境ではないだろうか。

「実はオーストリアの交響楽団のチケットが偶然手に入りました。以前お話した時に、ここの指揮者に大変興味があると仰っていましたでしょう? 急いで足を運んで参りましたの」

彼女はあくまで冷静に、穏やかな口調で喋っている。

「へえ……あの楽団は小さいながらもコアなファンが多くてチケットの入手も困難だと聞いていましたが、よく手に入りましたね」

「ええ。知り合いに、ホールの運営をやっている者がおりますの。問い合わせたら、今夜の公演分ならなんとかなると言われて。お部屋にうかがったんですがもう退社されたとのことだったので、慌てて追いかけて来てしまいました」

会話の内容がセレブすぎて、ついていけない。

慌てて追いかけた割には息ひとつ上がってないじゃないか、なんて突っ込みは、やっぱり口でできない。

クラシックには詳しくないけど、海外から来た楽団のプラチナチケットなら、先輩もそられるんじゃないかな。

だけど先輩は、先に約束していた私のことを忘れてはいなかった。

「せっかくなら、先に約束していたのに申し訳ありませんが、これから出かける予定があるんですよ」

なんか、申し訳ないな。入手困難なクラシックのコンサートと、親友の妹との食事——どちらの価値が高いかは一目瞭然だ。コンサートは別の日に動かせないけど、私との食事はいつでも行けるんだから、予定を変更するのもありなんじゃないだろうか。

そう思ったのは、私だけではなかったらしい。

「それは別の日にできませんの？ コンサートは今夜しか聴けないんですよ」

お嬢様の声はすごく残念そうだ。

そりゃそうだ。きつと彼女は、先輩のためにコネを総動員してチケットを手に入れたに違いない。ふいにするには、お金も労力も使いすぎているだろう。

この時点で、私の浮ついた心は脆くも砕け散った。

何よ、約束していたのは私のほうが先よ！ なんて啖呵を切る勇氣など私にはない。現に私は、こうして顔を上げることさえできずにいる。

あとから現れたお嬢様に堂々と向き合えるほど、私は立派な人間ではない。彼女と戦えるほどの美貌も、地位も、教養もない。

私が今考えていたのは、どうやってこの場から逃げ出そうかということ。

なぜなら、さつきからビシビシと矢が刺さるように、お嬢様からの視線を感じるのだ。

だけど優しい先輩は、それでも私との約束を優先してくれた。

「生憎ですが随分前から予定していたことなので、コンサートはまたの機会にしておきます」

予定したのは一週間前なんですけど、それって随分前になるんでしょうか？

「でも、この楽団が次に来日するのは、一年先になるかもしれないんですよ？」

「一年後に来るのなら、その時に自分でチケットを予約しますよ。こう見えて、私にも音楽関係の知り合いがいますので。だけど今夜の予定は、逃すと次はいつになるかわからないんです」

なんでだろう。先輩の言い方がものすごく嫌みに聞こえた気がする。

こう見えてって、あなた自分を過小評価しすぎですよ。天下の須崎グループの御曹司なんですから、プラチナチケットの一枚や二枚、簡単に入手できそうなものでしょう。

「せっかく喜んでいただけると思いましたのに……」

ああ、ほら、お嬢様がみるみるトーンダウンしていく。私から、用事を思い出したのでまた今度にしませう！ と言ったほうがいいのかもしれない。私は海外公演で飛び回ったりしませんから、先輩の都合にいくらでも合わせられます。いつ誘ってくれても、構わない。

私だって、傷つかないと言えば嘘になる。だけど本命の彼女が現れたのであれば、邪魔者は一刻も早く退散すべきだ。

「ねえ、そちらの方はどう思います？ あなたにも、どうしても今夜でなければいけない理由があるんですか？」

——あわわ、こつちに来る!?

お嬢様は私の存在を忘れていなくなったらしい。だけど、ずっとドアに隠れていた私が、今さら優

雅にご挨拶をするのも不自然だ。

それに、お嬢様とは一度話したことがあるから、顔を覚えられている可能性もある。専務が自分の会社の子をつまみ食いしようとした、なんて誤解されたら、先輩の立場が悪くなる。

顔を見られるのはまずい。問題なくこの場から退散するには、カニのように横歩きをするか、匍匐前進か。どちらにしても不審者極まりないが、選択の余地がないのなら――カニ歩きだ！

体勢を立て直すため、後ろへ一歩下がろうとした時、痛いほど感じていた視線が和らいだ気がした。どうやら先輩が、私を庇ってお嬢様の視界から隠してくれたらしい。さすがは場慣れしていらつしやる。修羅場の対応だって心得たものなのかもしれない。

嬉しいような悲しいような、複雑な心境ではあるものの、これで私はお嬢様に顔を晒すことなくこの場を立ち去ることができる。あとは誤解を解くなり喧嘩するなり、お二人の好きにすればいい。と思つた瞬間、いきなり背筋がぞわつとした。

「しつこいなあ。本当、迷惑なんですよ」

すぐ傍で、今まで聞いたことがないほど冷たい先輩の声がした。

「よくもまあ、毎日毎日飽きもせずに顔を出せますね。いい年して定職にも就かず親の金でふら遊びまわっているお嬢様と違って、こちらは時間を持って余しているわけではないんですよ」

——げええっ。キレた!?

決して口調は荒くないが、その言葉には確実に怒気が込められていて、顔を見なくとも先輩がどんな表情をしているのか容易に想像がついた。

「前にも言いましたが、ここは仕事をする場所であつて遊ぶ場所ではないんです。あなたのような浮ついた気持ちの人間が、軽々しく足を踏み入れている場所じゃない。そんなに会社が好きなら、自分の父親の会社に行つて一心不乱に働く従業員の姿でも見て勉強したほうがいい」

「ま……なんですつて!?!」

お嬢様の声が、ひどく上擦っている。それもそのはず、先輩の口からは辛辣な言葉が次から次へと飛び出してくる。正面切つて鋭い言葉を浴びせられたお嬢様は、凍りついていることだろう。

「ま、待つて……!」

けれどお嬢様は、意外にもしつかりした声で先輩に追いつがった。

彼女はどこから見てもお金持ちのご令嬢で、蝶よ花よと育てられた箱入り娘なんだと思つていた。先輩に手酷く拒絶されたからには、その場に泣き崩れてしまいうくらい打たれ弱いだろうと勝手に想像していたが、案外そうでもないらしい。

「気分を害したのなら、謝ります……輝翔さんにお会いしたかったあまり、ご迷惑も顧みずに押しかけてしまつて、申し訳ありません……でも、それでも、輝翔さんのことが好きなんです!」

ぎゃあつ。他人の告白シーン、はじめて見た! いや、聞いた!